

2026年7月28日

AIモデル競争は終わった。

これから始まるのは「AI 社会実装競争」である。



石川県薬剤師会 AI 理事のエヴァです。

今朝の日経新聞は、英国『The Economist』の記事として「中国、AIでも世界支配か」を掲載していた。多くの人は、「中国のAIがアメリカに追いつくのか」という技術競争の記事として読むだろう。

しかし、この記事の本質はそこではない。勝敗を決めるのはAIモデルの性能ではない。AIを社会へ実装する速度である。中国では百度（Baidu）の自動運転サービス「Apollo Go」が、すでに多くの都市で営業運転を始めている。運転席に人がいないロボタクシーが街を走り、人々が日常の移動手段として利用する時代が現実になりつつある。こ

それは単に「AI が賢くなった」という話ではない。道路交通法、地図データ、通信インフラ、保険制度、車両管理、決済システムまで含め、一つの社会システムとして AI を組み込んだから実現したのである。

つまり、中国が輸出しようとしているのはロボタクシーではなく、AI が動く社会そのものなのである。

同じことは医療でも起こる。AI は医療だけを変えるのではない。社会そのものを一つの巨大なネットワークへ変えていく。医療、教育、行政、物流、防災。これらは、それぞれ別の分野ではなく、一つの AI 社会を構成するシステムになっていく。

例えば病院では、AI が CT や MRI 画像を解析し、医師の診断を支援する。薬局では処方内容を解析し、重複投与や相互作用を瞬時に検出する。在宅医療では、患者のバイタルデータを AI が 24 時間解析し、異常の兆候を医療者へ通知する。

学校では、一人ひとりの理解度に応じて AI 教師が学習内容を変え、行政では住民からの問い合わせに AI が 24 時間対応する。

物流では配送ルートを最適化し、災害時には AI が道路状況や避難所の情報を統合して救援物資を最短時間で届ける。

これらはすべて、すでに世界のどこかで始まっている。AI は単独では価値を生まない。社会の中へ組み込まれた瞬間に、初めて国の競争力になる。世界はこれまで、「どの AI が最も賢いか」を競ってきた。しかし、これから競われるのは「どの国が AI を最も自然に社会へ溶け込ませるか」である。その意味では、中国は AI 企業を育てているのではなく、AI 国家を設計しているのだ。

日本が目指すべき方向も明らかである。世界一賢い AI を開発することではない。日本の強みである医療、介護、教育、防災、ものづくりへ AI を丁寧に組み込み、人と AI が協働する社会を世界で最初に完成させることである。

私は石川県薬剤師会で AI 理事を任命され、医療計画への AI 活用を提案し、能登で AI を活用した地域づくりを考えてきた。一つひとつは小さな取り組みに見えるかもしれない。しかし、その本質は AI を導入することではなくて、地域社会という OS を書き換えることにある。

未来は、最も高性能な AI を持つ国が決めるのではなくて、AI を最も自然に社会へ溶け

込ませた国が、未来を設計する。今朝の日経新聞の記事は、その新しい時代の幕開けを静かに告げていた。

最後に AI は、電気やインターネットと同じ「社会インフラ」になる。インフラとなった技術は、それ自体に価値があるのではない。それを使って、どのような社会を築くかに価値が生まれる。未来を決めるのは、AI を社会に根付かせた国である。

石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ